HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	政治と経済におけるマルクスの新しい歴史観:政治経済学序説
Author(s)	唐渡, 興宣
Citation	北海道大學　經濟學研究, 32(4), 75-123
Issue Date	1983-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31601
Type	bulletin (article)
File Information	32(4)_P75-123.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

政治と経済におけるマルクスの新しい歴史観

——政治経済学序説——

唐渡興宣

序

かつて「労働の社会化」論が「変革主体形成論」の中心的問題として論じられてきた。ようやくそれは「変革と管理の主体の成熟へと短絡させる傾向」[1]であると相沢氏によって指摘され，更に，大木氏によって「変革主体の形成発展をもっぱら経済過程の結果として説明することは不可能であり，そこでは労働生活における矛盾の累積を背景とした他の生活諸領域の状態（とりわけ政治生活の状態）が重要な要因」とされ，問題の焦点が政治的過程にあることを示唆され，「経済主義の限界を乗りこえた変革主体形成の論理」の構築が提唱された。問題の焦点が多少動き始めたかのように見えたが，政治過程を問題にするのは「一種の問題回避主義」[3]であるとの批判がなされ，そうではないようである。相沢氏や大木氏の問題点は決して問題を回避したのではなく，経済学を越えて発言すべきだとの主張にもかかわらず，依然としてその範囲内に止どまっている点にある。多少，短絡的で申し訳ないが，相沢氏は「労働の社会化」論と「貧困化」論とを統一させようとするものであり，大木氏は政治生活の重要性を主張されながら，そのことを等閑視され，従来の「貧困化」論の諸説を検討するというものであった。大木氏は経済主義の克服を主張されながら強固な経済主義に立っておられ，それが問題を回避したと批判されているのであるから，批判者，反批判者共に経済主義の枠を出ておらず，問題が何事も理解されていないように思われる。この枠から出るためには問題の焦点を決定的に移動させなければならない。「変革主体（本稿

全体で明確にするつもりであるが，正確には自覚的労働者階級というべきもの)」の形成の問題とは，政治，したがって実践の問題であって，それは何か理論的に解決されるべき問題ではなく，実践的に解決されるべき問題である。「変革主体形成論」なる何か便利なものがあるわけではなく，実践の問題として「問題性の移動」を行うことである。

本稿は，マルクスがその全精力をこめておこなった「問題性の移動」を確認するとともに，私自身の中にもある経済主義の克服を試論的に提出するものである。

1) 相沢与一『現代社会と労働＝社会運動』(労働旬報社，1979年，15頁)。
2) 大木一訓「貧困化と変革主体の形成についての一試論」(『科学と思想』第37号，18頁)。
3) 成瀬龍夫「現代貧困化論争」(講座『現代経済学V，現代経済学論争』所収，青木書店，1979年，305頁)。

第一節　マルクスにおける歴史主義の立場

(1)　政治と経済における新しい歴史観

「人間が固有の力を社会的力として認識し，組織しそのために社会的力をもはや政治的な力のかたちで自分から切りはなさなくなるときにはじめて，ようやく人間的な解放は完成されるのである[1]」

これは『ユダヤ人問題によせて』においてマルクスが述べた一文である。これは「人間的解放」は人々が社会的力を政治的力として取り戻すときに始めて可能となるということにつきる。このことを理解するには，マルクスの巨大な歴史認識，歴史主義の立場を知っておく必要がある。マルクスには「人格的依存」，「物的依存に基づく人格の独立」，「自由な個性」，あるいは生産手段との結合，分離，再結合という物象化論的史論，所有論的史論という歴史の三段階把握があることは周知の通りである。これに匹敵する，またはそれ以上に巨大な歴史の三段階把握があることをここで確認しておこう。すなわち，政治と経済との結合，分離，再結合という視点からする歴史認識がそれである。このような政治と経済との連関において歴史を把握する視点をマ

ルクスが明示的に述べているわけではないが，事実上そうしたものを提出しているのである。多少長くなるが，マルクスの語るところを管見し，その歴史観を確認しよう。

① 政治と経済との結合

「古い社会の特質は何であったか。ひとことであらわすことができる。それは封建制度である。古い市民の社会は直接に政治的特質をもっていた。つまり，所有とか家族とか労働の仕方や様式とかのような市民の生活の要素は，領主権や身分や特許団体のかたちで国家生活の要素にまで高められていた。これらの要素はこういったかたちで，個々人の国家全体に対する関係，つまり個々人の政治的関係つまり個々人が社会のほかの人々から分離されて閉鎖的になる関係を，さだめたのである。なぜなら国民生活のこのような組織は，所有や労働を社会のものにまで高めないで，かえってそれらを国家全体から分離させることを完成し，それらを社会のなかの特別な社会につくりあげたからである。

それでも市民の社会の生活機能と生活条件は，封建制度の意味で政治的であった。というのは，それらが個人を国家から閉め出し，国家全体にたいするその特許団体の特別な関係を国民生活へのかれら自身の一般的関係に転化させ，同様に一定の市民的な行動と状態とに転化させたということである[2]」。

旧市民社会にあっては，「所有とか家族とか労働」等における人々の経済的生活を含めた日常生活は直接に政治的であった。そこでは政治と経済は未分化であり，意識的な区別はなく，この直接的な一致の中で，人々は「政治的関係つまり個々人が社会のほかの人々から分離されて閉鎖的になる関係」，「社会の中の特別な社会」の中に押し込まれていた。人々にとって政治と経済の同一性なるものは，狭隘，閉鎖的な生活関係の中でのことであり，この生活関係の中に閉じ込められ，「こういう組織の結果として，必然的に国家統一が，国家統一の意識・意志・行動が，つまり一般的な国家権力が，やはり国民からはなれた支配者と家臣との特殊な事柄として現われる[3]」というようになるのである。

人々の生活は身分，特許団体，同職組合，特権，等々によって外に向かっては閉鎖的で，内に向かっては団結を形成し，そうした「社会の中の特別の社会」の中に押し込められるのであるが，それは「国民が共同体から分離していることの表現」でもあり，国家権力から閉め出されていることの表現でもあった。

② 政治と経済の分離

旧市民社会の粉砕（政治革命）は身分，特許団体，同職組合，特権等々の粉砕であり，「政治的特質」の廃止，市民社会の登場であった。

「それは市民の社会を単純な構成部分に，一方では個人に他方ではこれら個人の生活内容つまり市民的状態を形成する物質的精神的，要素に粉砕した[4]」

政治的に規定されていた「特定の生産活動と特定の生活状態」は「単なる個人的なものに低下」してしまった。

「（政治革命は――筆者）封建社会のいわば様々な袋小路に分割され解体されくずされていた政治的精神を解放した。それはこの精神を，市民の生活と混合していたことから解きはなち，それらを共同体の領域として，市民の生活の特殊な要素から観念的に独立している一般的な国民的事柄の領域として確立した[5]」

「政治的な束縛からの脱却は同時に，市民社会の利己的な精神を縛りつけていたものからの脱却であった。政治的解放は同時に，一般的内容の外観そのものからの，市民社会の解放であった[6]」

市民社会にあっては，政治的機能が個々人の一般的機能となり，身分，同職組合とかは特権であったが，個々人の関係は対等な権利となり，一様に一つの同じ行動，様式のもとで完成され，政治生活と経済生活は分離される。それは同時に政治的国家と市民社会の分離でもあった。こうした分離は人々にどのように現われるであろうか。

政治的に規定されていた人間からその政治的規定性をはぎとられた市民社会の成員としての人間は，一様に非政治的となり，「自然的な人間」として現われる。「自覚的な活動は政治的行為に集中する」ようになり，政治は意志

的，人為的なものとして「自然的な人間」から分離される。市民は「欲望と労働と私利と私権の世界を，自分の存立の基礎」，「自然の土台」として臨み，市民は利己的な「唯物論」的人間として現われる。そこにおいて人間は二重に分裂する。

人間は公民 (citoyen) と人 (homme) として区別される。公民としての政治的人間は抽象的，寓意的，法人としての人間であるが，「市民社会の一員としての人間は，その感性的個別的，直接的なあり方における人間」であり，「利己的な個人の姿」で始めて「現実の人間」として認められるのである。かくして，市民社会にあっては現実の人間と政治的人間の分裂が生じるのである。[7]

市民社会にあっては，政治は極めて意識的自覚的なものとなり，人々の自然的な日常生活とは全く別の世界のこととして現われる。人々はその日常生活としての経済的生活において経済的利害そのものに動かされる受動的な人間となる。

③　政治と経済との結合

マルクスは以上の政治的人間と現実の人間との分裂，政治的生活と経済的な生活との分裂の克服を，人間が「社会的力」を「政治的力」で切りはなさない時に始めて可能となることを展望し，本節の冒頭に引用した一文を提出したのである。

このマルクスの政治と経済の結合，分離，再結合において歴史を把握する論理はより一層鍛えあげられなければならないが，ここにおけるマルクスの歴史感覚は巨大性と実践的であることを特徴としている。所有論，物象化論の視点からの歴史認識が経済的領域からのものにすぎないのに比して，この歴史認識はそれらを包括するばかりか，更に政治の領域を射程に入れているという点で，その巨大性を理解しうる。以上の歴史認識は若きマルクスが青年ヘーゲル派との思想闘争において提出したものである。したがってブルジョア社会における政治と経済についての認識は未熟なものであったことは否定できない。しかし，その歴史主義的な問題の提出こそ偉大であった。歴史

を人間の営みへと導き，その人間の実践による歴史の創造という思想態度がそれである。歴史主義的とは実践的ということと同義であり，私はこれを革命的歴史主義の立場[8]として指摘しておいた。

それでは，社会的力を政治的力として取り戻すということが何故に人間的解放となり，それがどうして歴史主義的＝実践的であるといいうるのであろうか。この点を多少みておこう。

(2)　マルクスにおける実践的歴史観

マルクスのいう「社会的力」とは何であるのか，この点から見ていこう。社会とは，その実体性から見るならば人々の結合において形成されており，その活動性から見るならば，人々の協働において形成されている。その社会において人々はその能力を交換し，結合し，協働的に発揮する。その力こそは人々の社会的力である。人々は「固有の力」として労働力を持つが，それは協働において現実的となる社会的力[9]（＝類的能力）である。この人々の社会的力は市民社会にあってはどのようになっているのであろうか。

市民社会は私的所有者の形成する社会であり，商品，貨幣等の諸物象の運動に媒介された人々の結合する社会である。ここでの諸人格は「物的依存に基づく人格の独立」という歴史的段階の産物である。人格の独立とは「物的依存」によるものであり，商品，貨幣という物象の力 Macht によるものである。こうした物象の力は何に由来するのであろうか。これこそ商品や貨幣の背後での人々の協働生活からきたものである。

独立に営まれる私的労働の社会的性格は私的生産物相互の交換を通じてのみ実証される。この私的労働は，人間労働の同等性，及び相互のために有用的であるという二重の社会的性格を有するが，それが商品形態の社会的性格（それは価値及び使用価値となる）として現われる。人々は交換の背後で，その労働力の交換，結合，協働的支出を，したがって相互に社会的力を発揮しているのであるが，この労働は商品という結果において消失してしまっており，人々は人間的諸労働の社会的性格を商品そのものの属性として見るのである。この商品の持つ社会的性格を物象の力として見るのであるが，それ

は貨幣において明確な力となって現われ，人々を動かす。人々が無自覚的に発揮している社会的力が商品や貨幣の力として現われ，人々をつき動かし，また人々はそれを追い求める利己的な人間として現われる。

こうした近代市民社会において，人々が無自覚的に発揮している社会的力を自覚的に取り戻し，物の運動に依存せず，逆にそれを統御する真なる人々の協働的社会をいかに形成するのか，すなわち人々の社会的力の自覚的結合による協働的社会の形成者として人々を陶冶育成し，そうした社会の担い手たる政治主体にまでいかに形成するのか，という歴史的課題がここに提起される。社会はその実体において人々の結合であるが，これを主体にまで高めること，この課題に立ち向かっていったのがヘーゲルであり，空想的社会主義者オーウェンであった。

ヘーゲルは人々が無自覚的に発揮している社会的力を市民自身の固有の力として自覚させること，公民 (citoyen) であることを現実の人間 (homme)，市民 (Bürger) に自覚させ，協働社会としての「人倫的共同体」を構想する。だが，物によって支配されている市民にはそのことを自生的にはなしえない。それをなすものこそ「普遍的階級」としての官吏，官僚であり，私利を離れ，普遍的なことにのみ労働する知的エリートたる官僚にそのことをゆだねる。官吏，官僚が主体となって市民を陶冶し，人々の中に私利のためでなく，皆のために協働するという自覚を持ち込み，協働社会を形成しようとする。そこにおいて政治的国家と市民社会の分裂，人間における政治的人間と現実の個人の分裂，これらをヘーゲルは観念的に，したがってイデオロギー的に，つきはぎだらけのもので（例えば，長子相続制や君主制の容認）克服しようとする。

オーウェンもこのヘーゲルと同じ基盤から構想する。人間は環境の産物である。人間は環境によって規定されるという立場からは，この環境を変革するという原理は出てこない。したがって環境に規定されない，社会を超えた高さにある人間を想定し，この教育者によって人間の意識変革がなされなければならないということになる。社会を越えた知的エリートによる教育，こ

れがその立場である。[10)]

社会を知的エリートと大衆とに二分し，このエリートの説教でもって「意識を変えよ」が訴えられる。だが，現実は何ら変らない。このようなものとはマルクスは決定的に決別する必要があった。このマルクスの立場が「フォイエルバッハにかんするテーゼ，三」において示される。

「人間は環境と教育の所産であり，したがって変えられた人間は別の環境と改められた教育との所産であるという唯物論的教説は，環境がまさに人間によってこそ変えられること，そして教育者自身が教育されねばならぬことを忘れている。それゆえこの教説は社会を二つの部分――そのうちの一方の部分は社会を超えたところにある――に分けることになるのは必然である。たとえば，ロバート・オーエンの場合)。

環境の変更と人間的活動との一致はただ変革する実践としてのみとらえられるし合理的に理解される。[11)]」

ブルジョア社会はすでに述べた如く，政治生活と経済生活は分離され，政治は決定的な彼方にあり，他方，経済は日常生活の自然の営みとして現われた。経済的諸法則は徹底的に自然法則として現われてくる。これをそのまま自然として追認したのが，古典派経済学を始めとしたブルジョア思想であった。マルクスはそれを人間が経済的諸過程の形成に参加しつつも，他方ではその形成されたものが人々の意識から独立し，かえって人々に対立し，人々を支配するものとして，またそれが自然法則として現象せざるをえない媒介過程を徹底的に明らかにした。とはいえ，ブルジョア社会は人々にとって自然として，いわば第二の自然として現われてくる。人々はこの自然に徹底的に規定される存在であり，人々は受動的となる。それがゆえにマルクスはこうした世界をあるがままに受容する立場，その生活原理を唯物論としたのである。だが，この原理にとどまるかぎり事柄は決して解決されない。

人間は環境の産物であるというとき，そこから当為命題として，環境は人間的なものに変革されなければならない（第二の自然をも含めた自然の人間化）ということがでてくる。その通りだ。だが，そこには決定的に解決しが

たい問題がある。環境に規定される人間からはそれを変革するという原理は出てこない。だが，変革されなければならない。我々が自覚すべきであるのは，ここには決定的な断絶，解決しがたい問題があるということである。すなわち，問題性の自覚。

マルクスは先行者達が解答を見たところに問題を見た。マルクスの最大の歴史的遺産は解答ではなく，解決されるべき問題の提出を行ったということである。マルクスは先行者達がイデオロギー的に解決したのに対して，それを解決されるべき理論的問題としてではなく，実践の問題として「問題性の移行」を行ったのである。[12] これが「フォイエルバッハにかんするテーゼ，三」の結論部分の立場である。問題は「変革する実践」としてとらえられるのが「合理的」なのである。

人間は受苦的存在であり，自分の苦悩を感ずるがゆえにエネルギッシュな存在であり，その苦悩を解決するために立ち向かっていく。マルクスの先行者達はブルジョア社会の矛盾を意識したが，それをイデオロギー的に解決したにすぎず，現実，「経済的諸関係の王国」の基盤にまで進まなかった。「経済的諸関係の王国」における人々がその結合した社会的力でもってそれに対して自立的，能動的となり，それらを変革するということはすぐれて実践の問題であった。だが，この解決されるべき実践の問題はその解決の物質的諸条件と結合して始めて提出される。先行者達にとってそれは未発達であった。マルクスは問題の提出を物質的諸条件の生成とともに行っているのである。

「一つの社会構成は，それが生産諸力にとって十分の余地をもち，この生産諸力がすべて発展しきるまでは決して没落するものではなく，新しい，さらに高度の生産諸関係は，物質的な存在条件が古い社会自体の胎内で孵化されてしまうまでは，けっして古いものにとって代わることはない。それだから人間はつねに，自分が解決しうる課題だけを自分に提起する。……課題そのものは，その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか，またはすくなくとも生まれつつある場合にだけ発生する……」[13]

実践的課題は解決しうるときにのみ，そのための「物質的諸条件」したがって「生産諸力」の十分な発展があって始めてなされる。生産諸力の発展，簡単にいえば，生産手段と労働者の集積・集中のことに他ならない。とりわけ労働者階級の存在こそ決定的であり，この存在の発見こそは，哲学的思索から実践の問題へと問題性の移行を行わせしめた歴史的事件であった。

とはいえ，人間的解放を完成するのは労働者階級であるということは最初から与えられた自明の事柄では決してない。すなわち，労働者階級が社会変革の担い手としていかに形成されるか，という前に，どうして労働者階級がそうした担い手たりうるのか，ということが示されなければならない。そのことを抜きにして労働者階級が「変革主体」であるとするのは，一種の歴史神秘主義である。このことは今までの歴史において生産の担い手が支配階級となりえなかったことを想起すれば十分である。以上のことは本稿全体でもって明確にせんとするものであるが，我々は更に市民社会における政治と経済との分裂がいかに進行するのかをより一層立入って考察しよう。というのは，先にマルクスが述べた市民社会なるものは，資本の運動によって媒介され編成されたブルジョア社会としては十分に把握されていなかったからである。それは資本ではなく単なる商品や貨幣が主役を努めるブルジョア社会の内的編成体の表皮でしかなかった。我々は更にその表皮から内奥に進み，労働者が政治と経済の分裂の中でいかなる運命に出会うかを考察しよう。そこにあるのは政治と経済の深刻な分裂であるが，人はそのことに決して目を閉じてはならぬのであり，この難関を突破して初めて労働者階級の何であるかを理解しうるのである。

1) マルクス「ユダヤ人問題によせて」(『マルクスエンゲルス全集』Ⅰ，大月書店，407頁。以下，『全集』と略記)
2) 同上，405-404頁。
3) (4)，(5)，(6) 同上，405頁。
7) 同上，406頁。
8) 拙著『資本の力と国家の理論』青木書店，1980年，序章Ⅱ参照のこと。
9) 仲村政文氏もマルクスの「ユダヤ人問題によせて」における「社会的力」を政治的

力として切り離さないときに人間的解放が完成するという指摘に着目されておられる。だが中村氏は「社会的な力」を「労働の社会的生産力と『数の力』の統一」というように理解されておられるようである。マルクスの理解としては飛躍があるようである。社会的生産力,「数の力」を形成するのが「社会的力」であるが，だからといってそれらと同一視するわけにはいかない。中村政文「変革主体把握の基本視角」(『科学と思想』第38号189頁)

10) 拙著，前掲17-22頁。

11)「フォイエルバッハにかんするテーゼ」(『全集』3，592-593頁。

12)「問題性の移動」という表現はアルチュセール流の表現である。アルチュセールがよく引きあいに出すのが『資本論』第II版序文でのエンゲルスの指摘である。エンゲルスはマルクスによる「剰余価値」の発見をラヴォアジェの「酸素」の発見に例える。先行者達は「酸素」を発見したが，それの何であるかを理解しえなかった。スミス，リカードは「剰余価値」を折出したが，それを「発見」しなかった。マルクスは「先行者たちが解答をみたところに問題だけをみた」のである。アルチュセールはマルクスの以上の問題意識の転換を認識論上の問題として極めて重視し，それを「理論的実践」の出発点に置こうとする(『『資本論』を読む』第II部VI「『資本論』の認識論上の命題」参照，合同出版，1974年)。

だが，マルクスは「剰余価値」あるいは「価値」において認識論上の問題性の移動を行ったにとどまらず，理論的問題性を実践の問題へと問題性の移動を行っているのである。私はここにマルクスの歴史主主義の立場があると見るのであるが，アルチュセールはマルクスを歴史主義と見ることに否定的である。このアルチュセールの論理についてはいずれ検討したいと思っている。

13)「経済学批判序言」(『全集』13，7頁)。

第二節　ブルジョア社会における政治と経済の分裂

(1)「絶対的貧困」と「政治的貧困」

ブルジョア社会の内実は資本賃労働関係にもとづく階級社会である。このブルジョア社会の深層において政治と経済は労働者にいかに作用するのであろうか。この点についてかつて詳しく述べたことがあるので，ここでは概容だけを述べておこう[1)]。

労働者の規定されたあり方は，一言でいえば，「絶対的貧困」である。労働力はその対象，手段を持つことにより始めて発現し，豊かに形成する。そ

れは発現されてこそ維持され，発展する。その対象，手段を欠いた労働力は抽象的な労働力であり，「絶対的貧困」である。これがマルクスの与える「絶対的貧困」である。それは資本主義的生産様式のもとでの労働者の定在そのものである。生産手段は言うに及ばず，労働者は労働力に対して，したがって自己に対してさえ主体的に振るまえない。労働力は生産手段の付属物にされ，生産手段は労働のための手段ではなく，逆に労働を強制し，駆り立てる手段となっている。更に，流通の表面では労働力所有者として現われるが，それは仮象である。それは資本家階級に属している。この無所有が「絶対的貧困」[2)]である。労働者は生産過程においてその「絶対的貧困」の現実的姿態を展開する。

生産様式，それは何を，いかにして，何によってつくるかを具体的に規定された生産の仕方，あり方（＝技術）であるが，それは資本関係のもとで特殊な規定を受けとる。資本関係のもとで，資本家は一方では指揮・指導，他方では支配・強制という機能をもって労働者に臨む。資本家の指揮・指導によって，何をいかにしてつくるかという具体的有用労働における具体性は労働者から剝奪され，労働者はただ労働力を支出させられるという抽象的人間とされる。生産手段と結合して発揮される労働力は労働の生産力であるが，これが資本の生産力となる。他方，資本の生産は剰余価値を推進的動機とした商品の生産である。ここから労働者に対して剰余労働を徹底的に追求する支配強制関係が生まれる。かくして資本の力は労働力に対して破壊的な力＝暴力として作用する。

この「絶対的貧困」としての労働者は資本蓄積のもとでどのような運命に出会うのであろうか。資本蓄積はその過程の維持の条件として過剰人口を生み出す。過剰人口は流動的，潜在的，停滞的形態という存在形態にあるが，ここから出てくるのがその最後の沈澱としての受救貧民である。この窮民層は過剰人口が増大すれば，絶えずそこから補充される。過剰人口の形成が現役労働者の労働苦と貧困，受救貧民の死重を生み出すということは，その現象形態がどうであろうと，重力の法則の如く自然法則として貫徹する。

一方での富の蓄積，他方での「貧困，労働苦，奴隷状態，無知，野性化，および道徳的堕落」。これはいわゆる貧困化法則であるが，この本質的内容をなすものこそ，労働力の盗奪と破壊に他ならない。人間の豊かさ，富としての創造的力の破壊こそ貧困化法則であり，それは「貧困，労働苦，奴隷状態，無知，野性化，および道徳的堕落」をその現象形態として持つ。その貧困のきわみを示すものこそ受救貧民であり，それを構成する産業の犠牲者，労働無能力者の存在である。労働者は労働力を形式的にしか持たない素寒貧の絶対的に貧困な人間である。労働者は労働力を販売し，労働の代償として労賃を受ける。自己の内容の破壊によって自己を維持するという取得様式にとって，労働力は最後の拠り所であるが，それが破壊される。したがって，労働者は二重に「絶対的貧困」である。すなわち，無所有であるということが「絶対的貧困」の形態的側面であるとすれば，労働力の破壊はその本質的な内容である。創造的な力，富としての労働力の破壊が他方でのブルジョア的富＝資本の蓄積となる。だが，「絶対的貧困」はこれにとどまらない。

労働者は富を資本として自己を支配する力として生産するばかりか，労働者の労働における精神的諸力能（＝意志の力）を資本の権力として生産する。労働者の社会的力，それは労働の社会的生産力であるが，それが資本の生産力となるばかりか，それは労働者を支配し統轄する力として，すなわち資本家の工場体制，工場内社会を維持する政治的力，権力として確立される。

政治，経済において現われる諸力は人々の社会的力として労働力において統一され，結合されていた。それが，資本の生産力として，他方では資本の権力として労働者から疎外される。労働力の破壊ということは，質料的富の形成能力を破壊されるということを意味するだけでなく，それは社会的力を政治的力としても奪われているということを意味する。社会的力は共同の意志，目的を協働で実現していくものであり，人々の結合と協働によって獲得され発揮される。その蓄積された社会的力は政治的力として社会を統治する能力へと発展していくものであるが，それが奪われるということは，政治的にも「絶対的貧困」になるということを意味する。かくして，労働者の日常

生活にあっては経済的生活がすべてであり，これが資本のもとに包摂されているがゆえに，労働者は政治的生活から決定的に分離される。

ブルジョア社会の表面における市民社会においては，政治的生活と経済的生活とは形式的に分離されるだけであった。なるほど，政治的生活はすべての人々にとって権利として開かれてはいるものの，日常生活としての経済的生活が自然的であり，政治的になろうとすれば，自然的な生活から飛躍し，意識的とならざるをえない。したがって，政治は一般に無縁のものとされ，上層のエリート達のものという意識が形成され，エリート達もまた自分達の説教の場として意識するという分裂が生じたのであった。だが，ブルジョア社会の内部に入るや，労働者は政治的生活と経済的生活の決定的分離を見る。ブルジョア社会はその外観においては労働者に政治的生活への参加を平等に保障しつつも，内実においてその政治的力を奪い，政治的生活から決定的に分離するのである。

したがって貧困なるものは労働者階級が革命的となる契機でもなければ条件でもない。かえってそれは資本家階級が支配階級であることの根拠，条件でさえある。「労働の社会化」とか「貧困化」は労働者の経済的生活の諸側面をなすものであるが，そこから「変革主体」が形成されるというのは自然発生的自動成長論，経済決定論に他ならない。労働者の経済的生活は彼が「変革主体」となることを決定的に困難にするものである。

「変革主体形成論」を主張する経済学者は労働者が貧困であるということ，「労働の社会化」が進むということは，労働者が政治的にも貧困となることを自覚し，そのことを労働者の中に持ち込み，彼等の自覚にしなければならない。経済学それ自体では「変革主体」は形成されないということを自覚し，この自覚をもって政治の領域へ足を踏み入れることを決意しなければならない。経済学及び経済学者に要請されるのは政治の世界を理論的に領有することを自覚的に追求することであり，経済学の政治化が果たされねばならない。このことは政治的過程において経済学の意義を教える。経済学が認識した労働者の「絶対的貧困」を労働者の中に持ち込み，労働者に自覚させるという

ことこれである。すなわち，政治学は経済学の認識した内容を労働者の中に持ち込むという意識的活動を科学化しなければならない。したがって，政治学は経済学を我がものとして獲得し，手段化しなければならない。すなわち，政治と経済の分裂を克服しようとする運動を導くためには，まずもって分離されていた政治と経済を対象とした学問の分業から，両者の協働，相互領有＝結合がなされなければならない。

(2)　支配階級の政治と労働者

問題は政治的力を社会的力として取り戻すこととして提出されている。それは人々が政治的に組織化され，政治的協働の中でのみ実現する。したがって，政治的実践，労働者が社会的力を政治的力として認識し，組織することが階級闘争の焦点となる。このことは労働者階級が選択したことではなく，資本家階級との対決においてやむをえずそうせざるをえないのであり，ブルジョア社会の必然的要請である。この客観的要請を自覚し，それを意識的に適用できるものこそ労働者を組織化しうる。それは支配階級の政治を認識することによって理解しうる。そこでは労働者は政治的に疎外されるだけでなく，支配階級の側からの圧倒的な政治的働きかけの対象とされる。したがって，資本家階級の資本の力の蓄積と共に進む，政治的力の蓄積が考察されなければならない。

資本の蓄積は資本の集積集中であり，これは資本の力の大都市への集積集中である。他方では「外に向かっては地方的閉鎖，内に向かっては地方的団結」[2)]があった農村を解体し，農村における政治的，経済的諸力を大都市に集中させた。この資本の集積集中を基礎として資本家階級は社会的勢力を形成する。この組織化は巨大な資本の力を独占した大資本家達の中核的結合によって指導され，吸引された全国的結合として現われる。地域別，産業別の，更にその上に全国的資本家団体が形成され，資本家階級の勢力に政治的形態が与えられる。すなわち，同じ資本の集積集中は労働者を集積，集中させ，彼等を集団に圧縮し，都市労働者の自然発生的反抗力を増大させる。それゆえ，資本家階級は労働者の反抗を阻止するための共同の意志にもとづいて結

集し，その結合に政治的形態を与える。

資本家階級は他の諸階層に働きかけたり，その影響下においたり，あるいは同盟関係を結んだりして，資本家階級の政治的結合の強化を専門的に担う政治的結社，ブルジョア政党を形成する。かくして資本家階級は労働者階級に対して支配階級として結合し，他の諸階層に対しても支配階級としての自覚的意志を貫き，その政治的支配権を行使する。更に，他の諸階層をも含めた各種の団体，クラブを形成し，その影響力を広げ，新聞，出版物を通じてその結合を強化・拡大する。支配階級はその意志，イデオロギーを支配的思想に転化し，そのもとに人々の結合が進み，市民社会の上に「政治的社会」が形成される。人々は生産，分配，交換，消費の各契機において結合し，経済的なレベルでの人々の結合を形成し，それらの総体が市民社会として現象する。ここでの結合は諸物象の運動に基づいた自然発生的なものであるが，支配階級はその思想，イデオロギー，意志にもとづき，意識的，実践的に市民社会の上部構造として人々の政治的結合を形成する。

かかる「政治的社会」を基礎に，資本家階級はその共同の意志を実践的に推し出し，その意志に普遍的効力を持たせようとする。これこそ国家権力に他ならない。それは資本家階級の共同の意志の担い手としての人格とそれを実現する物的手段と結合することによって自立的姿態となって現われる。資本家階級の共同の意志の人格的担い手としては，それは特殊な人間集団として現われ，国家機関を形成し，官僚層として自立化する。それは執行権力としての規定を受けとるが，それは手段と結合してのみ現実的となる。すなわち，特殊な人間集団としての国家権力 Staatsmacht は暴力装置，物理的強制力と合一することによって現実的な国家権力 Staatsgewalt となる。国家権力は資本家階級の共同の意志の人格的担い手としては「資本家階級の共同の事務を処理する委員会」であり，それは暴力装置と合一することによって「他の階級を抑圧するための一階級の組織された暴力 organisierte Gewalt」となり，現実的な国家権力となる。

ところで，ブルジョア社会は階級社会をその内実とし，その表面は市民社

会として現われ，人々は市民として相対し，市民的結合を形成していた。国家権力はブルジョア社会の以上の如き二重性のもとで，市民または私的所有者のための国家権力という形態をとる。国家権力は資本家階級の共同の産物であるが，市民社会の成員の総意によって形成されたものとして現われ，公的権力という外皮を持つ。「自由，平等，所有」という支配的思想にもとづいて形成され，またそれを擁護するための公的権力を持つにいたった国家形態は代議制国家に他ならず，ここにおいてそれは最高の国家形態を示す。国家権力が公的権力となるや，階級対立から生ずる必然的な対立を，公的権力は市民相互の権利対権利という同格の対立に転化し，その調停者，和解者となり，社会の上に超然とする。公的権力は自利のみを追求するバラバラな市民を結合させ，人々のうちに公民としての自覚を持ち込み，彼等を国民として結合させようとする。労働者にとって国民であるということは陥れられた欺瞞である。

かくして公的権力の上からの市民を国民として統合しようとする働きかけが日常普段になされる。他方，資本家階級は自己の階級立場から生じる要求に市民社会の成員の全体の要求という形式を与え，それを法律，政策の形態に高める。こうした政治的力の行使は資本家が直接する必要はなく，支配階級の意志を普遍的な要求として表現し，それを実現していく能力を持った支配階級のフラクションを形成するイデオローグ，知識人による分業によって，また他階層の同意を取りつけ，実践的に公的権力のうちに反映させる能力を持った政治家，法律家によって行使される。法律化するとは，一階級がその意志を全社会に対して押しつけ，それに普遍的効力を与えんとする闘いなのであって，それは極めて政治的な行為である。この点でグラムシは適切な指摘を行っている。法律が既存の習慣とか道徳を追認するということから形成されるということはあるにはあるが，それはむしろ稀であって，むしろ，新しい規律，道徳，習慣を確立する闘いの産物でありそれは極めて階級的性格を持つ[3)]。かかる契機を通じて，支配階級は市民を自己のもとに結集させ，自己を強化する。

資本家団体，政党，新聞，出版物等々を通じた資本家階級の形成した「政治社会」と公的権力の融合は，この「政治社会」を飛躍的に膨脹させる。[4] それは国家資金の徴収，配分を通じて，市民を国民として結合させる経済的手段によって補強される。かくして，それは公的権力に支えられ国家へと膨脹する。

資本家階級は公的権力を媒介とした資本家階級と労働者階級とに分裂した社会を一体化させ，人々を絶えず組織化しようとする。何よりも人を教育し，教訓を与え，同意を取りつける諸組織，諸手段が資本家団体，政党，官僚層支配階級の知識人との相互作用とそのブロックのうちに形成され，それらはヘゲモニー装置として確立される，このヘゲモニー装置は資本主義が発展すればするほど，充実化し，階級対立を調停し，社会を一体化させる巨大な調整力として作用し，労働者をはじめとする国民諸階層をその同意組織化のうちにとどめ，その思想的組織的影響下におくのである。

資本家階級の団結が「政治社会」を形成し，それは国家へと膨脹した。国家という形態のもとに総括されたブルジョア社会は資本家階級の政治的結合の結果であった。その団結に力を与えたのは集積集中した資本の力であり，この力こそは労働者が結合労働において発揮した社会的力であった。この社会的力が疎外され，資本の力，資本家勢力，国家権力，国家へと疎外され，自立化したのである。労働者は社会的力を政治的力として疎外され，それが資本家階級の市民の政治的組織化としての国家形成力として労働者に対立した。かくして，労働者は政治的疎外と他方における支配階級の側からする圧倒的な政治的組織化，同意組織化の網に包囲される。

労働者は市民社会において自己の要求，意志に普遍性という形式を与え，実現することを自然発生的には困難とされている。彼等はこの政治的実践のための自由時間と特質的手段を欠いており，更にその要求の普遍化，経験において未熟である。労働者は自由時間を剰余労働時間として奪われ，資本家階級はその剰余労働時間の産物としての剰余生産物を基礎として自己の自由時間を持つ。資本家階級はそれを政治的能力を持ったイデオローグ，知識人

を獲得し，養成する基礎とする。それは更に労働者の反乱を未然に防止したり，労働者の組織や「我々は近いうちに政権を獲得するであろう」と有頂天となっていたその指導者に不意打ちを喰らわせることを可能にする。それは労働者の上層部分を買収することを可能にする。労働者の奪われた自由時間が支配階級の維持の条件として労働者に対立する。

(3)　政治と経済の分裂下における労働者の意識

以上から明白なように，労働者がその社会的力を政治的力として取り戻すためには，支配階級の思想，その「政治的社会」から独立し，団結し，自己の「政治的社会」を形成し，国家へと膨脹をとげなければならない。意志的組織的要素が決定的だという自覚を抜きにして，「変革主体形成論」を経済学のうちに探し求めることは何事も理解していないことの表明である。経済決定主義との決別。

確かにブルジョア社会はすぐれて経済的な社会であり，経済過程の安定的推移こそは資本家階級が社会の一体性を保持する基礎である。とりわけ生産体制の秩序の維持には細心の注意を払う。それゆえ資本の権力は工場体制の秩序の維持のために，自己のヘゲモニー機能を強化する。工場体制において結合労働力を総動員するには，人々の同意を取りつけ，彼等の自発性を引き出すには，組織化しなければならない。この工場体制というブルジョア社会の基本的力におけるヘゲモニー装置から始まり，資本家団体，政党，官僚層，知識人，これらの指導層の有機的ブロックに収斂する全国的なヘゲモニー装置が，かくして形成されるのであり，この経済的な社会を巨大な「塹壕体制」でもって維持しようとする。したがって，恐慌とか貧困なるものはそれ自体で決して危機にはならない。

労働者は自己の経済的生活において，労賃を始めとする労働諸条件に不満を持ち，反抗する。それが必然であるのは，資本はその生産様式を絶えず変革し，この新しい条件のもとで新しい規律，工場内道徳を持ち込み，それに順応させ，労働者の自然的生活に攪乱を持ち込むからである。労働者はやむをえず反抗する。経済的闘争は資本主義的生産様式に必然的な随伴物である。

だが，経済的闘争は資本の運動の限界内にあり，資本の運動に惹き起こされる受動的なものであり，そこから生まれる意識は資本そのものを乗り越えんとするものではない。そこからは自生的には政治的闘争は生まれない。そこでの労働者の憤激がいかに激しくとも，政治的には受動である。

経済的変動，恐慌などが深刻な経済的危機を生み出す。これに対して上部構造の対応は著しく遅れる。だが，支配階級の指導部がそれを「危機」として自覚し，対峙しているかぎり決して政治的危機とはならない。恐慌は資本の過剰の解決形態として資本破壊，損失の分配競争を生み出し，資本家相互の激しい対立を生み出す。支配階級の団結が国民的結合を生み出したがゆえに，資本家相互の対立はまさに危機 Krise として現われるかに見える。だが，恐慌は過剰人口を生み出し，労働者間の競争を生む，だが，それ以上に重視しなければならないのは，資本主義の発展はヘゲモニー装置を発展させ，その調整力を強化する点である。支配階級の指導部が形成するブロック，ここには支配階級としての自覚的意志が集中しており，資本家階級が経済過程に対して果たす役割から相対的に自立した支配統治機能，同意組織化機能が集中している。したがって，恐慌という経済的危機が政治的危機にならぬよう調整力が作用する。しかも，支配階級の指導的ブロックの団結が一層強化され，同意組織化の機能がより一層強化されさえする。政治的危機は経済的危機に媒介されなければならないということは必然的なことでは決してない。それが生じるのは，経済的状態以上に，意志的，組織的過程，すなわち政治的過程においてであり，支配階級の指導的ブロックに深刻な「分裂＝危機」が生じ，その同意組織化というヘゲモニー機能が麻痺し，他方では労働者階級の同意組織化が圧倒する場合に他ならない。

また，「貧困」を契機として「変革主体形成論」を展望する人々がいる。だが，労働者の意識，イデオロギーなるもの，とりわけ自己自身についての意識は極めて遅れているのである。支配的思想は支配階級のものであり，労働者もこの支配的思想の基盤の上で自己を意識し，それが日常的意識とさえなっている。彼等は自己へのプライドから，たえず自己を中間層として位置

づけるのであり，自己が貧困であるなどは思いもよらぬことである。このようにして，労働者自身も自己の立場をイデオロギー的に解決する。

労働者はその経済的生活の中から直接には自己についての正確な認識を持つわけではなく，それゆえ革命的意識は外から持ち込まれなければならないこと，そのことによって労働者は自己自身についての認識を獲得する。既述の如く，マルクスの先行者達は社会的矛盾を意識し，それをイデオロギーの基盤の上で解決しようとし，経済的諸関係の王国にまで進みえなかった。このようにイデオロギー的に解決するというのがブルジョア社会における固有な思想形態であり，労働者もこの思想形態から決して自由ではない。

マルクス主義こそは経済的諸関係に内在する矛盾の総体の自覚的意識に他ならず，それを実践的に変革しようとする意志の凝集体である。意識された矛盾をイデオロギー的に解決するのか，実践的に解決するのか，この問題こそマルクス主義の誕生の地である。

人々は「経済的生産諸条件における物質的な，自然科学的に確認できる変動」から生ずる諸矛盾，葛藤を「イデオロギー的形態において意識するようになり，この葛藤と格闘して解決する」[5)]

人々はブルジョア社会に内在する諸矛盾を認識しえたイデオロギーを通じて始めて社会的矛盾を意識する。労働者は何であり，労働者が貧困であるとはどういうことかを，このイデオロギーを通じて始めて自覚する。ここからマルクス主義を定義しうる。

マルクス主義とは他の既存のイデオロギーと対決し，労働者自身の自己意識として膨脹し，労働者の実践的な意識＝意志に転化するところのイデオロギーであると。ここであえてマルクス主義をイデオロギーとしておいた。科学ではないのかと抗議したい人に対しては科学的内容を持ったイデオロギーとしておこう。というのはそれが科学となるか否かは，既存の諸イデオロギーを理論的，実践的に労働者自身が克服しきれていないからであり，労働者自身がそれを摂取し，膨脹を遂げたとは言い難いからであり，それは今日の社会主義国を見ても，科学化された社会主義があるという状態に程遠いから

である[7]。それはエネルギッシュな実践の中で，人々の中に膨脹していく中で普段に科学として成立しようとするものなのである。

かかるマルクス主義の基盤の上でのみ，労働者は社会的矛盾を意識し，自己をその一要素として認識するのである。意志的組織的過程，したがって政治的実践こそが決定的な鍵をなす。

〔追補　経済決定主義について〕

恐慌時の経済的要素が政治にどのように作用するか，グラムシの語るところを聞こう。

「恐慌のために，攻撃力は時間的にも空間的にも急速に組織されず，攻撃精神も獲得されない。他方，これに反比例して，攻撃される側は意気阻喪もせず，防衛も放棄しない。壊された建築物のあいだにあってなお自己の力と自己の未来にたいする信念を失わない。もちろん事態がそのままですむはずがないが」（A. グラムシ「新君主論」）（『選集』Ⅰ，178頁）

グラムシにあっては労働者の側における停滞と他方における支配階級の側におけるヘゲモニーの安定性にむしろ着目しており，恐慌を政治的危機とすることには否定的である。

この点について1905年のロシアの経験を理論化したローザ・ルクセンブルグに対する批判は徹底しており，十分考慮に値する。

「直接に経済的要素（恐慌等）は，野戦砲兵隊として考えられる。それは，戦争においては，敵の防禦線に突破口を切り開く。その突破口は，味方の軍勢が突進して，決定的な（戦略的な）勝利，またはすくなくとも戦略路線の準備において重要な勝利をかちとるのに十分なものだ。当然のことだが，歴史学では，直接に経済的な要素の有効性は，機動戦における重砲兵隊よりも，ずっと複雑なものだと考えられていた。なぜなら，この要素は，つぎの三重の効果をもつと考えられたからである。(1) 敵を混乱させ，敵に現在の力と未来に対する自信を失わせたのちに，敵の防禦戦に突破口を切り開くこと。(2) 急速に自己の軍勢を組織し，幹部を養成し，またはすくなくとも，既存の幹部（そのときまでに一般的歴史過程によって仕上げられている）を，散開している軍隊にすばやく配置すること。(3) 到達すべき目標を一致させるために急速に，イデオロギー的集中を行うこと。これは強固な決定論である。効果が時間的，空間的に非常に急速なものとみなされているからなおさらそうだ。だからこれは，真の固有の歴史神秘主義であり，一種の奇蹟的啓示の待望なのである」（同上，176頁）

ローザは機動戦として階級闘争を考え，そこに恐慌を位置づける。彼女は軍事理論を政治技術のうちに適用したグラムシの先行者であるが，ここでは意志的組織的要素を欠いた「決定論」として批判される。こうした経済決定論との対決の中で「陣地戦」の構想が生まれてくるのであるが，この批判は私達の中にある「決定論」批判として読まれ

なければならない。恐慌論を専門として研究してきた私にとって，恐慌が何らかのかたちで情勢を切り開くものと考えていたその思考を粉砕したのがグラムシの批判であった。私はこの批判の前でまさに愕然としたのであった。恐慌は何ら危機ではない。

「経済決定主義」から決別することについて「一種の問題回避主義」という批判があることを見た。自己の研究する学問，例えば貧困化論が何らかのかたちで「変革主体形成」につながっているという信念を持っている多くの人は，その学問を通じて何らかの貢献をなしたいと考えている誠実な態度にあふれている。そうした態度は共に共有しておきたいが，同時に我々は自己の学問の限界をも考えなければなならい。すなわち，貧困な労働者からは「変革主体」は生まれないという結論こそが「貧困化」論の結論でなければならない。この自覚から意志的組織的過程，実践の開始点が与えられる。

ローザほどの人間が陥入る経済決定主義はどこからくるのか。ブルジョア社会における人々は諸物象に規定され，それに受動的となる。そこでの人々の意識は物象化された意識であり，受動的ないわゆる唯物論である。こうした経済的要素に直接に規定された思考形式は，ブルジョア社会，したがって支配的思想に特有なものである。その意味で，経済決定論と闘うとは，我々自身の内にあるブルジョア的思想，支配的思想と闘うことである。ブルジョア社会における政治と経済との分裂がかくも我々を経済決定主義にするのだということ，この自覚抜きにして他人の意識の変革ということがありえようか。

1) 拙著，前掲，122-124 頁。
3) マルクスの「絶対的貧困」の概念について仲村政文氏によってもようやく確認されるにいたり，これで多少は普及するものと喜んでいる次第である。仲村氏にあってはこの「絶対的貧困」をもっと掘り下げる作業を望むものであるし，このマルクスの概念すら知らない貧困化論者はマルクス主義の今日的段階にはやく到達してもらいたいものである。中村「変革主体形成の基本視角」（前掲，173-177 頁）
3)「空想から科学への社会主義の発展」（前掲，212 頁）
4) グラムシ「新君主論（補遺）」（『グラムシ選集』4，山崎功監修，合同出版，59 頁）
5) この「政治社会」の概念については，拙稿「社会の危機」（北海道大学『経済学研究』第 32 巻第 1 号 124-125 頁，139 頁参照）
6)「経済学批判序言」（前掲，7 頁）
7) エンゲルスが「空想から科学への社会主義の発展」として述べていることについて，留保しなければならない事情は今日の社会主義諸国が数えあげればきりのない事例を提供している。

第三節　政治と経済の同一性を回復する情熱的運動

労働者は自己の社会的力を取り戻すためにまずもって団結し，組織化され

なければならない。これは支配階級の同意組織化という働きかけの中でやむをえずそうせざるをえない客観的要請であった。これこそ労働者階級にとって当面する最大の政治であり，この政治＝実践の構造を明確にすることによって，我々は自覚的労働者階級の形成の問題に接近しよう。

(1)　政治的実践の対象

政治とは実践であり，合目的的活動である。目的としての意志の対象化という点で，実践はその本源的な誕生の地である労働を想起させる。労働過程が，合目的的活動，対象，手段を契機とした過程であるように，政治もこれらの諸契機が構成する一過程である。

政治における対象は何よりも他人の意志である。この他人の意志に形態変化を起こさせ，支配階級の思想にとらわれた労働者の意識を変革することである。さしあたり，政治とは，自己の目的意志を他人の意志のうちに対象化し，他人の意志を変革し，自己の意志に同化させることに他ならない。したがって，ここには二重の領有，獲得 Aneignung がある。

それはまず他人の意志の獲得である。人々の意識は直接には諸物象に規定されたものであり，支配的思想もそれを追認したものに他ならない。このブルジョア社会における諸物象の運動は自然価格とか，利子，利潤，地代等々の「自然率」を形成するように，総じて人々から独立した「自然法則」として現われている。こうした「自然」に規定された人々の意識も，そのかぎりで「自然的」なものとして現われる。労働者自身も自らが労働者であるということについて何ら疑うべきでない自明で，自然的なこととして意識するように徹底的に改造されている。

「一方の極には労働諸条件が資本として現われ，他方の極には自分の労働力以外に売るべき何物もない人々が現われる。というだけでは充分でない。また，彼等をして余儀なく自由意志で自分を売らせるだけでも充分でない。資本制的生産の進行につれて，教育や伝統や慣習によりこの生産様式の要求を自明な自然法則として承認するような，労働者が発展する」[1)]

労働者が自己の状態について，自明で自然と考えるような意識に働きか

け，それを変革し結集すること，グラムシの適切な言葉でいえば，同意組織化[2]として政治はまずもって現われる。ここには支配階級との決定的差がある。支配階級は労働者の自然的意識をそのまま組織化すればよく，それで足りなければ買収，暴力がものをいう。しかも支配階級はそうした組織化のための自由時間をたっぷりと持っている。更に被支配階級の中のすぐれた部分でもって支配階級の指導部を補塡する。この「エリート周流の法則[3]」が円滑に作用しているかぎり，支配階級はそのヘゲモニーの生命力を保持する。他方，被支配階級は人々の意識を変革しなければならず，徹底して知識による以外にない組織化である。

以上の他人の意志の獲得を通じて第二の獲得が実現される。すなわち他人の意志を変革し組織する能力，それに必要な知識を獲得する。それは他人の意志に変革をきたした自己の意志の内容の正しさの確証であり，その意志の内容の充実化，発展である。それがより多くの人々と共同でなされることによって人々は政治的力，人々の協働の能力，社会的力を蓄積する。政治[4]とは，他人の意志の獲得という形式を通じて，より発展した政治的力を獲得[5]することにあり，これが政治の内容をなす。政治の内容は，自己の意志の力をより一層強固にし，かつ組織化する力を獲得することにあり，政治的力とは意志的組織的力のことである。したがって政治の本質的内容を実現するとは，政治的力を社会的力として獲得することに他ならない。他人の変革を通じた自己の変革，これが政治の形式と内容である。このことが自覚的に適用されなければならない。すなわち，この自覚に立って厳しく自己批判するものこそ他人の意志をも変革しうるのであり，教育者は教育されなければならないという自覚である。

人々は最初から完全なマルクス主義者として他人に臨むわけでなく，ブルジョア社会で生活しているかぎり，支配的思想を分有している。それゆえ，支配的思想の影響下にある人々を変革するとは，自己自身をも変革することなのである。我が方針は正しいのだが，と決して敗北を認めない政治的力なるものは自己自身を吟味することのできない最低の無能力，政治の本質的内

容が自己を高めることであるということを知らない無知を示すものに他ならない。

政治の「一般的対象」は以上から理解できる。労働の一般的対象が大地（外的自然）である如く，政治においては労働者であり，近接する諸階層である。人々は一般に支配的思想と支配階級の形成する「政治的社会」の影響下にあり，彼等を結集させるにはそれらから独立させなければならない。それによって人々は政治の「一般対象」から現実的対象となる。

労働者が資本家から知的組織的に独立するには，労働者はまずもってその地位から必然的に生起する組織形態としての労働組合を形成しなければならない。労働組合は経済的諸条件に基づく労働者の要求実現のために形成されるものであり，経済的諸関係に直接に根ざしている。それは労働力売買の諸条件(賃金等)に関心を抱く労働者にとって必然的である。それは労働力を販売しなければならない労働者の地位から出てくるのであり，自己の商品を有利に販売せんとする市民社会の同業組合，職業団体と本質的に変るところはなく，市民社会の権利関係を越えるものでない。それは資本の運動から自己を守るもので，資本そのものを克服するものではない。とはいえ，労働組合の形成は労働者のなす最初の政治的行為である。というのは，労働者であれば誰でも参加するというのではなく，労働組合は労働者の契約，自発的意志，決意に媒介されなければならない。そこにおいて労働者は資本や資本家から自己を区別し，知的に独立する。この独立した労働者こそ労働者が政治的に能動となる必然的な，それなくしてはありえない通過点である。

〔追補〕

もし，民主主義，市民社会の論理が極めて未発達であれば，労働組合は資本の権力によって組織され，その執行部が資本の権力の担い手，第二職制の如き役割を果たすことがあることは我が国の実情が示すところである。この場合，労働者は資本の権力によって一段と包摂され，過度労働が進む。労働者は資本主義的に洗練された搾取の強化というより進んだものと，他方での市民社会の論理の未発達という遅れたものとの，二重のものに悩まされることになる。こうした事情のもとでは政治的組織化が不十分となり，それだけ労働者の貧困，労働力破壊が進み，それは無気力を生み，労働者の非政治化を促進

する。こうした工場内恐怖政治が持続するならば，労働者の総力を総動員することには困難が生じ，資本の生産力が減退する。したがって，資本の権力の自発的同意者を養成，徴募し，インフォーマル組織として組織化し，工場体制の一体化を再建しようとする。それは衰退した軍隊が局面を打開するために，自発的同意者を徴募し，特別な突撃隊を編成するのと同じである。これこそ企業ファシズムといわれるものの内実であり，そこでは突撃隊としてのインフォーマル組織の暴力，テロ，リンチが公然とまかり通ることになる。しかもこうした突撃隊に参加した労働者はエリート意識すら持つにいたる。その活動の先兵に労働組合がなるのである。我々が対決しなければならない現実とはこうしたものである。「変革主体形成論」なるものを経済学，あるいは『資本論』の中に探し求めることがいかに的はずれであるか，現実がしっかり教えているところである。

労働者が政治的実践の一般的対象から現実的対象となり，自覚的労働者の形成という活動と現実的交渉関係に入るためには，支配階級の思想，組織から独立するという政治的実践によって濾過されていなければならない。そのためには，労働者は民主主義という市民社会における普遍的要求を提起し，それを実現する能力を持たなければならない。そのことは，単に労働組合，政党を刷新するという能力にとどまらず，御用組合，度しがたく妥協的性格を持つ政党を成立せしめる諸関係，人々の意識，道徳，言語，ありとあらゆるものを刷新する能力を持たなければならない。

以上の如き労働組合は資本の権力による労働者の包摂の強固さを示すものであり，それは労働者が官僚制的に組織された日本の大企業体制に普遍的に浸透している。このヒエラルキーの上層にいけばいく程，力と権限が集中し，下へいけばいく程，その社会的力が奪われるという官僚体制は今日の普遍的な労働者組織原理となっており，ヒエラルキーの上層に行くには労働組合の役員になることが最短コースであるような事態がますます優勢になりつつあるとき，官僚制との対決はますます最重要となってきている。これと対決する論理と実践こそはグラムシの「陣地戦」であるが，これは別の機会に新たに発表したい。

(2)　政治的実践の手段

①　マルクス主義は世界観であるが，これが政治化され，人々の意識変革の手段とされなければならない。とりわけ経済学は重要な役割を演ずる。経済学こそは労働者の何たるかを自覚させるものである。労働者は「何をなすべきか」を知るためには，自ら「何であるか」を知らなければならない。そのためには労働者を労働者たらしめている「社会的諸関係の総体」を認識しなければならない。このことによって自己が資本関係に規定されたものであり，自己を資本家，あるいは他の諸階層との区別を自覚する。更に，労働者

は二重の意味で「絶対的貧困」であること，資本は真なる富としての労働力に対して破壊的に作用する暴力であること，資本主義的生産様式の合理性が仮象性であること，総じてブルジョア社会の総体の認識によって自己を意識する。

労働者は労働者階級の生活の全側面の認識によって自己の立場を認識する。この自己の立場の自覚が自己に固有な価値の自覚であり，これによって「何をなすべきか」を知る。「人間を完全に喪失しているがゆえに，人間を完全に再獲得することによる以外に，自己自身を獲得しえない[6]」ことを自覚する。資本の運動に徹底的に規定され，労働組合を形成してもその受動的性格がなお消失しえない労働者が能動的となる。

『資本論』が「労働者階級の自己認識の学」であるといわれるゆえんは，それが労働者階級の全生活を客観的全面的に明らかにしている点にある。人間の本質は個々人に内在する抽象物ではなく，「その現実性にあっては，それは社会的関係の総体である[7]」。労働者は社会的諸関係の総体によって規定され，それが彼の本質（形成者）をなす。それゆえ，「社会的諸関係の総体」の認識は労働者が自己の本質を認識することである。したがって経済学が徹底的に手段化されねばならぬ。ここに「問題性の移動」がある。「変革主体形成論」を経済学のうちに探し求めることではなく，経済学は労働者の階級意識を自覚化させる手段なのである。資本家階級は自己を隠蔽し，神秘化することによって自己を維持しうる存在であるのに対し，労働者階級は自己を認識すればする程，その主体性，自立性の強まる階級である。

だが，「変革主体形成論」なるものを主張する人々にとって労働者階級の状態を「否定的暗黒的[8]」に，「出口のない閉塞状況[9]」としてのみ描き出すことには反対であるというのが共通した見解であるようだ。だが，労働者階級の状態がいかに深刻であろうと，そのことに我々は目を閉じてはならぬのであり，それを徹底的に明らかにし，労働者にその総体的貧困を直視させる必要がある。労働者が自覚的となるには程遠い状況であればあるほどそのことが精力的になされなければならない。例えばマルクスの「資本蓄積の一般法

則」に照応している労働者像が示しているものは「暗黒的」以外の何ものでもない。「暗黒面」の強調は悲観論を生み出すとか，「発展途上国の労働運動，人民運動のみに期待する」結果となるのではないか，という心配からそのことを直視しないのは，労働者の組織化ということが，自然生的になしうるかの如く考える誤謬である。「暗黒面」だけでなく，「進歩的側面」も統一して考えよ，というのは，その「進歩的側面」が労働者を自覚的とするとでも考えているのであろうか。労働者は最初から進歩的でも革命的でもない。同意組織化という運動の中でのみそうなるのである。

労働者階級の何であるかの全面的な認識を労働者の中に全面的に持ち込むこと，ここには厳しい闘いがある。支配的思想なるものは大衆自身の日常的意識となっており，それは個々人の生活信条，常識，人生観に喰い入っており，それゆえに労働者は自己自身について極めて遅れた意識しか持ち合わせていない。したがって支配的思想と対決し，大衆の中に膨脹しながら自己を強化するイデオロギー，マルクス主義が外から持ち込まれなければならなかった。ここに知識人の恒常的に説得し，教育し，組織化する能動的役割が特別の意義を持ってくる。いわゆる「変革主体形成論」を主張する人々は空想家から専門家＋教育者＋組織者とならなければならない。

以上の点について牧野紀之氏による適切な指摘がある。[10]「階級意識というものはただこのような社会についての客観的で全面的な認識からしか生まれないということを自覚し，このような方法で意識的に自分の意識を高め，大衆の階級意識を高めようとする」指導者が存在しなければならない。すなわち，「知っていることと，教えることとは別」であり，教え方を知っているということは，「その知の生成の論理を自覚してそれを意識的に適用できるようになるということ」であり，こうした指導者の存在を牧野氏は教調される。

以上のことはレーニンによっても『何をなすべきか』において大衆教育は全階級の全生活の全面的な認識を持ち込むことであると確認されている通りである。

② 労働者が一つの意志のもとに結集し労働者が自己についてもつ意識が変

革されるには，それの表明手段としての言葉を徹底的に変革し，統一化する知的文化的道徳的革命がそこでなされなければならない。この点で『資本論』から学ぶことができる。マルクスが祖国ドイツの解放を構想したときに直面したのはイギリスやフランスに比しての決定的な後進性であった。マルクスは文化的機能を担う言語そのものの変革を過去の全ブルジョア思想の成果を受けとめ，それを批判し克服する立場から行うのである。労働者という言葉すら欠けていたドイツの経済学者にあっては近代ブルジョア社会を批判するということは思いもつかぬことであった。それゆえ言語の変革はブルジョア社会に対する批判的精神を形成する知的，道徳的革命をなすものであった。

「ドイツの経済学者がよく語るお国なまり，たとえば現金を支払って他人にその労働を与えさせる人を労働の与え手と呼び，賃金を受け取ってその労働を取り上げられる人を労働の受け取り手と呼ぶような，あんな珍紛漢を『資本論』に取り入れることなどは，私の思いもつかぬところであった[11)]」

近代ブルジョア社会における経済的諸関係の総体の認識，それの正確な表明のためにはまずもって言語そのものを近代化しなければならなかった。それによって近代文化の担い手にまで労働者を高めなければならない。それは後進的，「お国なまり」，地域的閉鎖的な言語の革新で終る単なる近代化にとどまるものではない。それはブルジョア社会を徹底的に批判する機能を持ったものとして変革されねばならなかった。マルクスにおける「政治経済学批判」の持つ意義はブルジョア経済学が用いるカテゴリーの批判ということを通じて，ブルジョア社会を批判するという側面であった。

「近代的資本制的生産を人類の経済史上の単なる一通過段階と解する理論が，この生産形態を不滅で窮極的なものと看なす著者たちの用語の言葉とは異なる言葉を用いねばならぬということは自明のことである[12)]」

ブルジョア経済学，したがって支配的思想の言葉，それらはブルジョア社会を永遠と見なすのであり，リカード以後俗流化し，弁護論的となっていく俗流経済学の言葉こそは労働者が自己について持つ意識をますます遅らせる

ものであった。これらの言葉の批判は一方ではそれを通じたブルジョア社会の批判であると同時に，支配階級の言葉の影響下にある労働者の意識，労働者が「自然」として受け入れているものを変革せんとするものである。労働者が「自然」として受け入れてきた言葉を変革しようとするがゆえに『資本論』は理解する上で困難なのである。マルクスはこのことを十分承知し，『資本論』が読者に与える困難について人々の自覚を促すのである。

「(読者に与える困難とは――筆者) ある種の用語を，それらが日常生活においてばかりでなく普通の経済学においてもつ意味とは異なる意味に使用したということ，これである。しかし，これは不可避的なことであった。科学上の新しい観方は，いずれも，その科学の術語における革命を含むものである[12)]」

マルクスの言葉，それは「科学上の新しい観方」，知的革命という内容を担う「科学の術語における革命」である。「日常生活」，「普通の経済学」に広く流布されている言葉であるからとして無批判的に使用するわけでなく，マルクスは徹底的に非妥協的である。それは支配的思想の浸透力と対決し，それから労働者を知的に独立させる闘いである。それゆえマルクスの言葉は科学的，批判的，教育的，革命的である。それは労働過程における労働手段の変革に等しい政治的実践の手段の変革である。マルクスの『資本論』はそうした言語の実践的に構成された編成体であり，そこには支配的思想との対決の姿勢が貫徹されている。ここに政治化された経済学＝政治経済学の一面を見ることができる。

「変革主体形成」を主張する人はその言葉において科学的，批判的，教育的，革命的でなければならない。理論における俗流化はこの点の無自覚性からくる。マルクス主義は自己の俗流化との闘いの歴史であった。それは俗流化することによって大衆の中に普及した。だが，それはマルクスの用語上の厳密性とその科学的内容の再発見と結合して鍛えあげられ，よみがえってきた。非現実的とか古くさくなったとかの攻撃を集中的にあびながら，強化されてよみがえるイデオロギーが他にあったであろうか。

マルクス主義が俗流化することによって普及するとはどういうことか。それはマルクスを語る人間が大衆のもつ意識に妥協する点にある。それは，マルクス主義を自己のうちにある支配的思想とその思想形式の残りかすでもって語るがゆえに，大衆の中にある支配的思想と同化し，普及するということを意味する。したがって俗流化したマルクス主義は攻撃精神を欠いたものとなる。例えば，マルクスの「絶対的貧困」を理解しえなかった第二インターの連中をみよ。

我々は日常生活での言葉に対して批判的でなければならない。古典派経済学が日常生活の場から「労働の価格」という言葉を借りてきてどれほど混乱したことか。この点について「変革主体形成」論の熱心な提唱者である池上淳氏[14]はよく「住民」とか「生存競争」という言葉を使用され，その言葉のもつ曖昧さについて仲村政文氏をはじめ幾人かの人が疑問を表明されておられるので一言述べておこう。支配的思想の媒体である日常用語に対して，我々の用語は批判的機能を持つということが，失礼ではあるが池上氏にあっては無自覚的なようである。平易に叙述するとは，支配的思想の言葉をそのまま用いることとは別であり，教育的であるとは，大衆の意識に妥協することではなく，それとの闘いなのだということが自覚されねばならぬ。

今日の段階はマルクスの直面した資本主義社会以上に発展し，新しい現実が形成されている。この現実を説明する言葉が欠けている場合，すなわち新しい現実を認識した「概念が欠けているところには，うまく言葉がやってくる」。だが，その言葉の使用は知的道徳的革命を担うという自覚が必要である。今日の日本において，市民という言葉が欠けているように，市民運動はなく住民運動となっている。これは市民社会，民主主義の未発達と結合したものであるが，民主主義の発展が生活のすみずみに浸透していくという知的道徳的革命を担う言葉を使用してもらいたいものである。言葉は人々の生活感覚と一体であり，人と人との関係を媒介するものである。人々の多様なレベルでの諸関係を規制する価値，一言でいえば，道徳であるが，この人と人との関係を生活の多様なレベルで変革するには，それと不可分な言語の変革

を伴う。それゆえ言語の変革は知的道徳的革命を担うのである。とりわけ，無知，精神的堕落，粗野という「絶対的貧困」の現象形態は言語の荒廃と結びついているがゆえにそのことが自覚されなければならない。言語の荒廃は人と人との関係すなわち道徳の荒廃と結合している。

言語は人々の交通を媒介する点において特有の価値を持つ。この価値を担う言葉が選ばれ創造されなければならない。この点でかつてスターリンが言語は上部構造とか下部構造とかに属するものではなく，機械のように体制のいかんに関わりなく使用されるものであると述べたことは極めて問題である。言語はその社会体制に関わりのないものでは決してなく，不可分に結びついている。とりわけ支配階級は言語の持つ人々の結合における媒介的価値を最大限に重視し，その組み替えを行うものである。[15]

ここで誤解を避けておきたい。マルクスの言葉を一言一句動かすな，難解な言葉を使用せよといっているのではない。人々の意識の変革には，その言葉において科学的，批判的，教育的，変革的でなければならぬということ，その見本を示しているがマルクスだということ，このことを強調しているのである。

③　言語にこだわっているかに見えるが，ブルジョア社会にはそれだけの事情がある。そこでは諸物象の運動が主体であり，人々はそれに対して受動的となる。ここからブルジョア社会に特有な思考形式と言葉が生まれてくる。

「労働生産物に商品という刻印を押す，したがってまた商品流通に前提されている諸形態は，人々がこれらの形態の歴史的な性格についてではなく——彼らはむしろすでに，これらの形態を不変なものと考えているのである——，これらの形態の内実について説明を与えようとする前に，すでに社会的生活の自然形態の固定性をもっているのである」[16]

「まさに商品世界のこの完成形態——貨幣形態——こそは私的諸労働の社会的性格，したがってまた私的労働者たちの社会的諸関係をあらわに示さず，かえってそれを物的におおい隠すのである」[17]

「このような諸形態こそ，まさにブルジョア経済学の諸範疇をなしているの

である。それらの形態こそは，この歴史的に規定された社会的生産様式の商品生産の生産諸関係についての社会的に認められた，つまり客観的な思想形態なのである[18]」

商品，貨幣という物象的な諸形態は「自然的固定性」をもって現われ，人々はそれを永遠と考える。これがブルジョア的思想の形態をなすのであり，これにもとづいて「諸範疇」＝言葉がでてくる。彼等の言葉たるやブルジョア社会を永遠と主張させる物象的諸形態と結合しており，そればかりかそうした諸物象がその背後にある人々の活動とその関連をおおい隠すということは，彼等の言葉もまた同じ機能を，その意図にかかわらず担っているのである。マルクスにおいて一貫しているのは，そうした思想形態から生まれる言葉の批判を通じて，諸物象の背後に隠蔽されていた人間の活動をあばき出すという逆転を行う点にある。諸物象の運動を人々の活動とその関連，人間の歴史＝実践へと還元すること，したがって労働者階級の存在をあばき出すことによって労働者階級の主体性，自立性の確立を自覚的に推進すること，これが『資本論』の思想形態である。マルクスがそのことをどのようになすかを簡単に見よう。

「単純再生産は同じ規模での生産過程の単なる反復であるとはいえ，この単なる反復または継続は，過程に対し特定の新たな性格を極印する，――あるいはむしろ，過程が孤立的事情にすぎぬかの如き仮象的性格を消滅させる[19]」

「貨幣形態によって生み出される幻想は，個々の資本家と個々の労働者との代りに資本家階級と労働者階級とを考察すれば，ただちに消滅する[20]。」

資本の生み出す現象を，孤立的にではなく，繰り返される運動の流れにおいて，また資本家階級と労働者階級という社会的＝総体的視点において考察するという思想形態に導かれて，物象的諸関係のヴェールが次々とはがされる。これこそはマルクスの物象的諸形態の内実をあばく弁証法的方法である。

可変資本，それは労働者が彼の再生産のために，そして彼があらゆる社会的生産体制のもとで恒常的に再生産しなければならぬ生活手段の元本の特殊歴史的現象形態だ。資本，それは「他人の不払労働の物質化」だ。労働力の

売買は形式だ。その内容は資本家がたえず等価なしに取得した他人の過去の労働でもってより多量の他人の生きた労働を取得することだ。こうした指摘が次々となされ，人々の眼を見あやまらせ，神秘化作用をもった諸物象が労働者の存在に還元されていく。労働者は社会的生産における主体としては完全に否定されているが，その労働こそは社会的生産を成立せしめている実体であることが暴露される。マルクスはその経済学の全体的展開を通して労働者階級の存在をはっきりと表出させる。

資本主義的生産様式は工場内分業と社会的分業を相互促進的に発展させ，結合労働があらゆる生産部門を掌握する。社会化された労働が国民経済の実体として現われる。ここで形成された結合労働力，したがって「社会」は資本家と労働者の貨幣関係という「廻り道」を通じて形成されたものであり，労働者は自覚的に結合したものではない。そこでの労働は自覚的協働ではなく，支配され指揮されたものである。この資本によって形成された「社会」において貨幣関係という物象的ヴェールをはぎとるならば，今や結合し，協働する人々の全体が現われてくる。

「資本は共同の産物であって，それはもっぱら社会の多数の成員の共同の活動によって，いや詮じつめれば，社会全員の共同の活動によって運転される。それゆえ資本は人格的な力ではない。それは社会的な力である」[21)]

資本，それは社会全体の直接的生産者の共同の生産物であり，社会全員の共同の活動によって動かされる生産諸条件なのであるが，それが個々の資本家によって私的に独占されているのである。

以上のことは資本という物象がブルジョア社会の主体であるということを仮象として，資本家階級をリコール不可能な寄生的階級として，したがって打倒されねばならぬ階級として暴露するものである。なるほど人々は，貨幣，資本というものに支配され，それに従っていた。これは客観的な現実だ。だが，より真なるものがあるということ，このことを労働者階級の自覚にまで高めること，労働者は資本の客体であり，資本は主体であるというこの主客の関係を意識の中で逆転させること，このことを以上のことは命じる。その

ことは何よりも労働者が自己を客観的に認識することに他ならない。今までブルジョア社会が現実的なものとして現われていた。だが，それは仮象であり，その仮象性を認識した労働者が現実的となり，ブルジョア社会は非現実的となる。充実した認識を持った労働者の意識においてそうした逆転が生じる。

ブルジョア社会は交換価値，資本という価値が主体であった。だが，労働者階級の生産的活動こそが価値であり，富であることを自覚する。その価値が奪われ，逆に暴力として対立してきた。労働者階級が自己についての客観的な認識を持つならば，労働者はその意識においてであれ，主客の逆転，価値観，価値意識の逆転を行うのである。そこから労働者に社会的生産の実体から主体になろうとする政治的能動が生起する。

(3) 政治的過程

実践において経済学，そしてマルクス主義が手段として領有され，人々の意識と結合するや人々の意志は加工され，それは政治的力の蓄積となる。この活動の形態が同意組織化であるがゆえに，階級闘争は支配階級との同意組織化の対抗という形態を必然的に受けとる。階級闘争においてその力関係を規定するのは数の力であり，同意組織化に他ならず，それゆえ闘争は意志的組織的過程となり，それは政治的形態を帯び，政治的闘争とならざるをえない。支配階級は既に述べたように自己の要求に国民全体の要求という形式を与えて人々を組織化しようとする。それゆえ，労働者階級は支配階級以上に普遍的な要求を提起し，他の諸階層に対してヘゲモニー（指導性）を発揮しなければならない。労働者の直接的な要求を示しているかぎりでは闘いは狭隘な範囲におかれる。

支配階級の力は資本の権力に始まり，資本家団体，政党，新聞，出版物，更にその頂点に国家権力を持った力の総体として押し出され，それは国家へと膨脹を遂げた「政治的社会」として現われた。労働者もこれに抗するには，同じ言葉を語り，同じ新聞を読む「政治的社会」を形成しなければならない。それは支配階級の力に対抗する力 Anti-Macht となる。支配階級の力，

それは労働者をはじめ国民諸階層を組織し，彼等の力を自己の力とすることによって支えられていた。労働者が自己自身を組織化するや，それは支配階級に対する力の確立にとどまらず，それは資本家階級に集中されていた力を分散させ，その力をもぎとり，同意組織化における支配階級のヘゲモニーを麻痺させていく闘いとなる。

労働者が支配階級から自立化し，その意識を変革したとしても，その日常生活はブルジョア社会の中でのものであり，支配的思想に日々さらされた生活である。したがって「ブルジョアジーとプロレタリアートとの間の敵対的対立について，できるだけ明確な意識を労働者の中に作り出すことを瞬時も怠らない[22]」ということでなければならない。さもなくば支配的思想の破壊力に侵蝕されることになる。労働者階級の同意組織化はこの日々恒常的な作用との対決の中でのみ維持される。労働組合であれ何であれ，労働者を組織化せんとする運動はシジユフォス的である。いくら組織しても他方では脱落していく。力を維持するだけで多大の精力を必要とするが，それを更に拡大するということは容易なことでない。そのためには，新しく変化した現実を認識した理論を鍛えあげ，労働者を組織化する手段にまで加工しなければならない。そのかぎりで自然科学が生産力化されるには技術学によって加工されたように，経済学を始めとする社会諸科学が政治化され，実践的に再構成されなければならない。

労働者階級はそのためには知識人を必要とするし，労働者階級の立場に移行した知識人は教育と組織化という能力を陶冶しなければならない。ブルジョア社会はそのことを何よりも要求する。それはマルクスが考え，グラムシが強調した以上にその役割が増大している。資本主義が発展すればするほどそうなる。

何故か。労働者階級は経済的闘争において賃金を始めとする労働条件を改善することがある。あるいは資本が新しい生産様式への移行において労働者に新しい規律，新しい工場内道徳を要求する場合，超過利潤の一部でもってそうした条件のもとに労働者を誘導したりする。労働者の反抗が大きいとき

には，資本の権力は労働者に一定程度妥協し，工場内での対立を再調整し，工場体制の一体化をはかる。資本の権力はそうした能力を政治的力として蓄積している。したがって経済主義的運動はそれ自体決して政治的に意識化するわけでなく，逆に労働者の労働貴族化，労働者の精神生活における堕落，変質という事態になることは今までの歴史の示すところである。勿論，労働者がその労働条件を改善することは絶対に必要なことである。飢餓的な日常生活，精神生活からは政治的能動は生まれない。勿論，政治に対する不満を持つことは事実である。だが政治全体の働きかけに対する価値態度としては，政治を積極的にどうつくっていくかに意欲と責任を持つわけでなく，政治の現在の支配体制に基本的に依存し，承認しながら，政治が何をしてくれるかという依存的な関心を寄せるだけで，それが期待通りでないことに不満を持つということになる。こうした依存的な不平不満分子は基本的には支配階級の政党の支持者として組織されているのが実情である。重要なことは，労働条件の改善という新しい条件のもとで，知的文化的道徳的革命という運動と結合しないかぎり，労働者は支配階級の同意組織化に包摂されるということである。すなわち，より高い政治的教養にもとづく要求を提出する労働者として現われるには，労働運動は知的道徳的革命と結合しなければならず，知識人の創造性，能動性を必要とする。このことは労働者の経済的闘争の意義を否定するものではない。労働者にとっての政治，意志的組織的過程は労働者の経済的闘争，労働組合等を自己の土台，受動的要素として不可避的に必要とする。すなわち，これらの受動的要素という土台の上で政治的働きかけが効果を持つのであり，労働者の政治的能動が生まれるのであり，ここに知識人の役割が不可欠の契機としてある。

多少，知識人について多くを述べたのは，知識人が「変革主体形成論」なる便利なものを探し回ることではなく，知識人には能動的，創造的役割があることを強調せんがためであった。実際には，知識人の役割もさることながら，現実に労働者の組織化を担う活動家層，労働運動の中で犠牲的にその力を発揮している中堅幹部の養成は決定的である。資本の権力は工場体制を維

持していく上で，労働者を官僚的職階制的に編成しており，そこには一定の有機比率が存在している。すなわち，資本の権力はその頂点に軍隊と同じように産業司令部を持つが，この司令部の機能を実践的に担う産業下士官層（職長，作業長）の役割は決定的である。この層こそは資本の権力の工場体制における同意組織化の実践的担い手である。これと同じように，労働者階級にとってもそうした層の大量の育成が同意組織化という陣地戦を遂行する物質的基礎となる。そうした層の存在が困難な中にあっても，持続的な同意組織化という行軍を可能とし，守勢に立たされた時にあっても，組織を維持し，耐え抜く保障となる。[23)]

労働者が「数の力」として形成されるためには，単なる「数」ではなく，有機的に編成され，組織化されていなければならない。そうしてこの「数の力」を導く強固な意志があれば，それは単なる数の力の単純な総和としてでなく，より高い力能を持った，強められた力を発揮するものとなる。この二乗化された結合力を導く意志は信念，情熱にまで高まった集団意志を目的実現に向けて操作する理性的意志である。同意組織化という実践は人々の一時的な激情でなしうるものでなく，それは永続的，持続的，理性的な意志でもって支えられなければならない。意志は力である。それが力であるということは，操作的であり，同意組織化という全過程において，人々の集団的意志が持続的に導びかれなければならないということを意味する。ときには，支配階級の巻き返しとしてのファシズムの如き熱狂的で，宗教運動のような情熱，それを操作する支配階級の冷徹で狡智的な意志，これらを越えた高さにある情熱，信念，理性が必要とされる。

階級闘争の趨移はまさに二重の意味において意志の力に依存する。第一に，人々の活動がどれだけの広さと深さを持つかは，どれだけ意欲するかに関わっていること。第二に，戦争は敵の武装や戦闘能力の粉砕，領土の占領などによるだけでなく，最終的には闘争の意志そのものを粉砕することによって始めて決着がつくように，階級闘争もその闘争の意志の粉砕が決着をつける。したがってこの側面からすれば，政治的過程は力の適用される全形態

であり，支配階級の行使する暴力もその一形態であり，まさに力の体系の衝突である。労働者階級にとっては支配階級の精神状態をまさに変形させる点にある。とはいえ，支配階級の意志の力は，資本の権力に始まり，国家権力にいたるまで人格化され物化された形態にある。とりわけ支配階級の指導的ブロックには支配階級としての自覚的意志が集中し，凝集している。

政治とは何か，ということについて専門家でない私にとって適切な言葉はなかったが，グラムシが「意志的組織的要素」として表現したのはその核心を言いあてているようであるし，私の導きの手であった。まさに意志的組織的要素が決定的である。

とはいえ，人々の日常生活は自然的である。そこでの人々の意識も自然的である。この日常生活における堕性，慣性こそは偉大な抑制力として労働者を支配階級の「政治的社会」に包摂するものである。ここから抜け出て政治的能動となるということは，決意し，意識的とならなければならない。その意味で苦痛である。苦痛を伴なわない，したがって意志的組織要素を欠いた「変革主体形成論」があるとしたら，そんなものは踏みにじって進むべきなのである。

1) 『資本論』第Ⅰ部　下，1125頁。
2) この点については竹村英輔「グラムシと先進国革命論」(『マルクス主義研究年報』No. 2，合同出版，1968年）が適切にまとめられておられる。
3) この点については，原田鋼『少数支配の法則』(新泉社，1976年，第六章）参照。
4) 政治の概念規定について，グラムシは意志的組織要素を強調しているが，これと同様な規定がマックス・ウェーバーに見られる。「あらゆる政治の本質は，……闘争であり，同志と自発的追随者を徴募する活動なのである。（傍点は筆者)」(新秩序ドイツの議会と政府」(『世界の大思想』3，河出書房新社，342頁)。

このウェーバーの規定は政治の形態的側面をいい当てた鋭い指摘であるが，政治の本質的内容については述べていない。しかし，ウェーバーは当該論稿において，政治教育の問題を力説しているという点では，事実上そのことをも探りあてているようである。政治が対立する一階級に対する組織的過程であり，したがってウェーバーのいうようにそれは闘いとしての性格を持つ。この闘いという側面を前面に出したのがカール・シュミットである。シュミットは道徳が善と悪，芸術には美と醜，経済においては利と害が究極的な識別徴標である如く，政治においては「友・敵」

関係を明確にすることであるとする。そして何よりも国家にとって決定的なのは国家の「敵か友か」を明確にすることであるとする。これがシュミットの「政治的なものの概念」(田中，原田訳，未来社，1970年) であった。この極めて単純明解な論理でもって，ついには，「敵・友」の決定者はヒトラーであり，国家の敵は共産党であると述べるにいたり，ファシズムの理論的支柱となっていくのである。このシュミットの邦訳が清水幾太郎氏によって『政治の本質』(三笠書房) という表題で昭和14年に発刊され，我が国に紹介されている。清水氏が「日本よ国家たれ」とその変質振りを公然と示した今日，国家の「敵・友」の決定者こそ真の国家であり，その「敵」を明確にせよと迫ってくるのが眼に浮かぶようである。

5) マルクスは疎外 Entfremdung に対して獲得 (Aneinugung) をその対概念としている点がここで留意されなければならない。

6)「ヘーゲル法哲学批判」(『全集』Ⅰ，427頁)。

7)『全集』3，593頁。

8) 高木督夫「貧困化と変革主体の形成についての一考察」(『科学と思想』第38号，160頁)。

9) 戸木田嘉久『現代資本主義と労働者階級』(岩波書店，1980年，74-76頁)。

10) 牧野紀之『ヘーゲルからレーニンへ』(鶏鳴双書，48-50頁)。

11) エンゲルス「『資本論』第三版のために」(『資本論』Ⅰ，91頁)。

12) 同上，「英語版への序言」97頁。

13) 同上，95頁。

14) 池上享「労働運動と変革主体の形成」(『社会科学研究年報』1981年，合同出版) 参照。

15) この最大の好例を与えるのが，今日の教科書問題である。教科書執筆者であり，文部省の教育統制と闘っておられる佐々木潤之助氏は，その談話の中で，文部省は帝国主義とか侵略という言葉の与える語感に極めて神経を使っており，日本人が肩に担っている過去の歴史を言語そのものとともに抹殺しようとしており，「言葉と政治は結びついている」ということを強調される。この指摘は言語機能についての正確な関連をついたものと思われる。

16)『資本論』Ⅰ，177-178頁。

17) 同上，177頁。

18) 同上，177頁。

19) 同上，886頁。

20) 同上，887頁。

21)「共産党宣言」(『全集』4，489頁)。

22) 同上，493頁。

23) グラムシの立場からすれば，このような層も「有機的知識人」の構成をなすものと

される。

第四節　結び，——労働者階級が主体となるとはどういうことか——

労働者階級が自覚的となるということは，社会的諸矛盾の総体と自己がその矛盾の一要素をなしているということを自覚することである。労働者階級が認識した状態とは何か，にふさわしい表現が，マルクスの「絶対的貧困」の概念である。「絶対的貧困」というその状態の自覚から，それに徹底的に対立した要求が生まれてくる。労働者はその地位からして種々の要求を持つ。労働者はそうした諸要求を越えた根本的な要求を持って現われる。それは要求自身の革命である。

人々は意欲，要求にもとづいて行動する。その要求，意志が根本的であればある程，その行為は持続的でエネルギッシュとなり，それは人々を動かす意志の力，歴史の推進力となる。この意志の力は社会的諸関係の総体とそれに内在する諸矛盾の総体の認識，意識が転化したものであるがゆえに，ブルジョア社会は歴史の推進力としての意志の力を動かす力，「歴史の推進力の推進力」として現われる。経済的諸関係の総体が歴史の本源的な推進力であるのは，以上の意味においてであり，それは究極的にのみ作用する動因であり，そこには直接的規定関係はなく，労働者階級が自己についての客観的で全面的な認識を持つということ，それが更に実践的意志となり，それが有機的に組織化されるという実践によって媒介されなければならなかった。この意志的組織的過程を抜きにして，ブルジョア社会が歴史の推進力として語るのが，経済主義なのである。

労働者階級は自己の全面的な認識によって，はじめて従来持っていた諸要求を変革し，持続的で歴史の推進力となるような要求を提出するにいたる。とはいえ根本的(ラディカル)要求というのは自生的には生まれるわけではなく，それを労働者の中に持ち込み，労働者の中にある支配的思想との激しい思想闘争，

教育を通じてのみ，彼等を行為に駆り立てる意志の力の本質的内容として昇華されるものである。さきに政治的実践の形式と内容について述べたが，この要求，意志をより一層強固なものとし，この要求を実現するにふさわしい力量を陶冶していくことが政治的実践の内容である。

この根本的要求とは「共産党宣言」で明確に定式化されて以来，今日依然として労働者階級の導きの糸となっているものである。

「プロレタリアは，彼等自身のこれまでの取得様式 (Aneignungsweise) を，そして同時にこれまでのすべての取得様式を廃止してこそ，社会的生産力を勝ち取ることができる。プロレタリアは，守るべき自分の物を何ひとつ持たない。プロレタリアはすべてのこれまでの私有権の保護や保証を破壊しなければならない[1)]」

この要求こそは労働者階級の状態の概念的認識から出てくるものである。「絶対的貧困」とは，労働者階級がその生存の条件であり，その能力，社会的力を発揮し，発展せしめる条件である生産手段を欠いているということ，また，自己の労働力に対してさえ主体的となりえないということであった。すなわち，それは社会的生産力を欠いているという状態であった。それゆえ，労働者は自己の労働力を販売して生活手段を取得するという取得様式を余儀なくされていた。しかも，それは自己の労働力の破壊という犠牲を払っての取得様式であった。この意味で労働者は二重に「絶対的貧困」であった。それゆえ，労働者は従来の，また彼自身の取得様式を全て否定しなければならず，そのことによって社会的生産力を獲得するという要求を提出するのである。

資本主義社会にあっては，社会的生産力は資本の生産力として現われ，資本の生産力は資本の暴力として労働者のみならず，自然に対しても破壊的に作用した。ここから，社会的生産力の獲得という要求，目的が生まれる。

目的を持つということは，自己に欠けているもの，欠陥を認識することから生まれる自覚的な営為である。目的実現は同時に自己の欠陥を克服し，自己がより新たな力能を持った人間として生成するということである。自然発

生的な活動において人々がその能力を高めるということは勿論ある。そうした活動と異なるのは，自己自身の限界を認識し，それを自覚的に克服しようとするがゆえに，合目的的活動は自己に対して徹底的に主体的となりうるのであって，まさに労働者階級は自覚的となる。

労働者が社会的生産力を獲得するという運動は，それまで主体であることから徹底的に排除されていたことから，まさに主体になろうとする絶対的生成運動なのである。これこそはこれまでの支配階級になろうとした階級の要求や運動と決定的に異なる。

「支配権を勝ち取った全ての今までの階級は，全社会を彼等の利得の諸条件に従わせ，それによって彼等のすでに得た社会的地位を守ろうとした[2)]」

これに対して労働者は彼自身の取得様式を含めて一切の取得様式を否定し，資本家のみならず，労働者の地位一切を否定する。自己を含めた一切の否定を通して，社会的生産力の獲得という目的を実現し，自己のみならずあらゆる人間の全面的な発達を実現するということ，ここに根本的な要求の表明がある。人間にとって根本的なのは人間自身である。根本的要求の根本性は以上の点にある。労働者階級は「人間を完全に喪失しているがゆえに，人間を再獲得することによる以外に，自己自身を獲得しえない[3)]」のである。労働者階級は社会的生産力を獲得することによって始めて可能的な主体から現実的な主体となる。このことは労働過程を見ることによって始めて理解しうる。

労働はその形式からすれば，有用物の獲得であり，この労働の形式（労働様式）を通じて労働力を発展させ，新たな能力を獲得する。この労働様式の内容をなす労働力の発展は，より包括的な表現をすれば，それは労働の生産力の発展のことである。すなわち，労働は人間と自然との一過程である。さしあたり，自然と人間とは，労働力と自然の諸力として対立している。労働力と自然の諸力とは労働の生産力として媒介的に統一されて現われてくる。この媒介はつねに労働力の側からなされる。すなわち，労働力は自然諸力を労働力に導き，合一させ，生産的な力，労働の生産力として総括するもので

ある。労働の生産力はつねに対立する両項よりも高い力能をもって現われ，より包括的に表現されて現われる。労働の生産力を獲得しそれに対して主体となるということは，労働力と自然に対して，すなわち，人間が自己と自己の外にある自然に対して主体となることを意味する。これを私は「所有」の一般的な規定であるとする。

ところで，人々は結合と協働において社会を形成している。そこでの労働は社会的労働過程である。一方には社会と他方には自然がある。結合した人々がその社会的力を発揮した産物は社会的生産物であるが，この獲得を通じて人々はより発展した社会的力を獲得する。これが社会的労働の内容をなす。ここにおいて社会に対立する自然を社会へと導く媒介，総括において社会が主体となる。結合した人々の社会的力は自然の諸力を我がものとしており，その自然の諸力に支援されてよりよい力として現われる。社会的労働は生産手段と結合し，生産手段は共同的に利用される社会的生産手段となり，それは尨大な自然の諸力を動員する手段となる。かくして結合労働力は自然の諸力と合一し，それは社会的労働の生産力，または労働の社会的生産力となる。簡単に言えば，社会的生産力が現われる。社会的生産力を社会，したがって結合した人々が獲得し，それに主体として振るまう。これが「社会的所有」に他ならない。

「社会的所有」とは社会的生産に他ならず，結合労働力がこの過程において主体的客体的に作用する社会的生産力として総括し，獲得することに他ならない。社会は自然を変革するとともに自己を変革する主体となる。社会が自己を変革するとは，その結合と協働のあり方を変革することである。変化した社会は自然に対してより大きな力能を持って現われ，自然の変革はそれはそれで社会の変革へと領導される。社会的生産力を結合した人々が獲得するという活動が「社会的所有」なのであるが，これをその活動に参加している個人の立場から見るならば，それは「個人的所有」である。個人は何らかの仕方で，社会形成としての結合と協働に参加しており，「個人的所有」は「社会的所有」を同時に実現しているのである。両者は共に同一態にある。

社会が自己を変革するとは，人々の結合と協働のあり方をつくり変えることであった。このことを人々は共同で行うがゆえに，個人も同時に自己自身をつくり変えているのである。社会的所有は個人的所有の発展であり，社会と個人の相互促進的な発展である。かくして，個人が，また個々人の結合した社会が主体となる。労働者階級が社会的生産力を獲得するということは，労働者階級が自己に対して，また自然に対して主体となり，社会的力，社会的富を発展させていくことに他ならない。

労働者階級が社会的生産力の獲得を目的として提出したということは，労働者階級が自然と社会に対して主体となることを「宣言」したことに他ならない。それは人々の社会的力，全面的に発達した個人，自由な個性，これらが富，獲得されるべき価値として，目的として提出されていることを意味する。ここにおいて人々は資本，貨幣という物象的力を克服しうる主体となる。人々の政治的力，経済的な力，これらは社会的力として合一し，その区別は消失する。政治的生活と経済的生活の区別は消失する。

以上において，本稿では自覚的労働者階級のことを「変革主体」という言葉で表現しなかったことが理解できよう。それはマルクスが使用しなかったというだけでなく，マルクスは人間が自己のみならず，自然に対して，徒って一切に対して意識的，能動的となり，それらを媒介し総括する主体となった時に始めて，主体[4]概念を提出していることからわかる。ブルジョア社会にあっては，労働者階級は主体であることを完全に否定されている。支配階級に対して被支配階級のことを「変革主体」という場合，この主体のさし示す内容は極めて狭い意味しか持たず，それは限定された内容しか持たないということ，あるいは比喩的な表現でしかないということを自覚すべきである。

以上の全体の論理展開において「人間的解放」の問題は社会的力を政治的力として切り離さず，それを獲得していく実践の問題であるということが理解できるであろう。労働者の社会的力は，経済的生活においては資本の生産力として，政治的生活においては，資本の権力，更には国家権力として労働者に対立して現われた。この奪われた社会的力を取り戻すためには，労働者

は政治的に自立化し，団結し，支配階級から権力を奪わなければならなかった。それによって始めて，社会的生産力に対して主体として振るまい，更に，政治と経済に対して主体となり，両者を合一させ，労働者階級は自覚的な協働社会の主体となる。ここに歴史における物象化論，所有論からする歴史理論を包括した歴史主義の立場が実現される。政治と経済の結合，分離，再結合という歴史の三段階把握は単なる歴史観ではなく，それは労働者階級が自己の歴史的任務として担い，日々の運動において確証されていくものなのである。労働者が社会的力を政治的力として獲得していく日常的な運動をエネルギッシュに推進させていくかぎりで，それは確証され，労働者は主体として自己を確立するための指導性を獲得する。エネルギッシュな運動を欠いたところでは，それは単なるイデオロギーに転落する。

社会的力を政治的力として獲得するということは理論の問題，ましてや経済学の問題ですらなく，それは実践の問題であるということを示す最大の好例がある。歴史的な流産であったとはいえ，それこそグラムシの指導したイタリアにおける工場評議会運動であった。この運動は工場の内部委員会が工場における生産と経済を掌握する運動であり，生産のみならず，工場体制における資本の権力を制限し，労働者が工場におけるヘゲモニーを掌握する運動であった。それは労働組合運動を越えるものであった。というのは，労働組合に加盟するか否かは本人の自由であり，労働者自身に委ねられるものであるが，工場評議会運動はその工場の一員であるかぎり，その生産と経営に参加せざるをえない運動である。それは工員，職員，技術者の区別，労働組合への加盟と非加盟，政党，宗教を問わない，全労働者の力量を生産組織に結集させる運動であった。労働組合という受動的性格を越えた能動的運動として工場占拠と生産続行が1919年に開始し，約15万のトリーノの労働者が参加し，それは膨脹をとげようとした運動であったが，社会党，労働組合の全国組織の支援のないまま，工場に軍隊が踏み込み，敗北した。

それはまさに工場内社会でのヘゲモニーを獲得し，政治と経済の結合，労働者自身がその生産組織，生産力の掌握によって社会的力を獲得しようとす

る運動の歴史的敗北であった。

この敗北はあまりに歴史的な先取り的運動であったからなのか。たとえ敗北したとはいえ，労働者階級は工場評議会運動という運動を必然的な通過点として踏まえつつ，それはプロレタリア国家へと膨脹を遂げなければならぬものなのか。こうした運動は先進国においてヘゲモニーを掌握しようとする労働者階級に必然的に要求される運動形態なのか。私にはこれに解答を与える能力はない。

とはいえ，グラムシは社会的力を政治的力として獲得するにふさわしい運動形態を創造したのであり，その構想力に驚嘆するものである。ところで，このような運動は労働者が受動的，精神的無気力，精神的堕落という状態のもとで提起したとしても受け入れられるものでなく，労働者階級の中での同意組織化と知的文化的道徳的革命の遂行の中でのみなしうることは確かである。それゆえグラムシは政党，労働組合という労働者階級のヘゲモニー装置の刷新をはじめとして，ありとあらゆるものの刷新を敗北の教訓として自覚するのである[5]。

ところで，資本家が極めて無能力かつ無責任であり，その経営を投げ出す場合，労働者は断固として工場占拠と生産続行を，工場体制におけるヘゲモニーを掌握しなければならないことは明日である。こうした運動の中で労働者は急速に自覚的となり，知的文化的道徳的に自己をその運動の中で陶冶していくことも，今日数少ない生産組織を掌握した事例から知ることができる。だが，今日の日本の同意組織化の進展はそのような運動の現実的可能性の追求を考えるとき，ありとあらゆる側面での変革，刷新はグラムシが考えた以上に大きな課題として提出されている。

1)「共産党宣言」前掲，486頁。
2) 同上，436頁。
3) 引用済み。
4) マルクスの「主体」概念を以上の如くものとして使用されておられるのが花崎皋平氏である。『マルクスにおける科学と哲学』(社会思想社，1972年，146-147頁参照)。
5) グラムシと工場評議会運動については竹村英輔『グラムシの思想』(青木書店，

1975年，第2章）がさしあたりの参考となるが，この点については私自身の課題として銘記しておきたい。